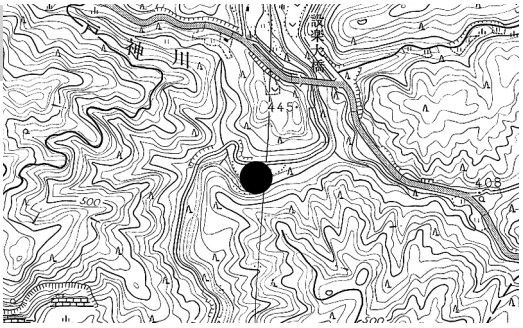
川向東貝津遺跡（かわむきひがしかいづ）



調査地点（1/2.5万「田口」）

所　在　地　北設楽郡設楽町川向字東貝津
（北緯35度6分26秒 東経137度33分54秒）

調査理由　設楽ダム建設

調査期間　平成22年11月～平成23年1月

調査面積　384㎡

担　当　者　池本正明・阿部敬

調査の経過　設楽ダム建設用の県道拡幅に伴う事前調査として、国土交通省から愛知県教育委員会を通じ、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

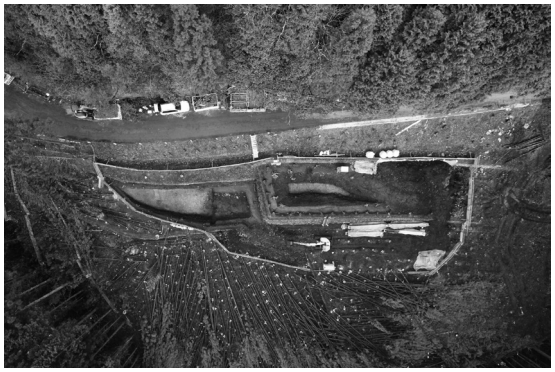
立地と環境　遺跡は豊川支流の境川右岸の標高約370～380mに立地する。付近には縄文時代草創期から晩期の遺跡が散在しており、川向地区に隣接する大名倉地区では縄文時代早期前半を主体とする大名倉遺跡などがよく知られている。30年ほど前までは近世末ないし明治期に拓かれたと推定される棚田が展開していたが、現在ではスギの植林が行われている。

調査の概要　今年度は、確認調査によって推定された遺跡範囲のうち北半にあたる区域を対象とし、主として縄文時代包含層の調査を行った。石垣で区画された棚田面を単位としてA区、B区、Ca/Cb/Cc区の都合５区に分け、概ねこの順で調査した。結果として、A区とB区では山側の斜面地にあたっていたことから崖錐堆積物が著しく、遺物は近世末ないし明治期の磁器片が1点出土しただけだった。他方、緩斜面または平坦面にあたっていたC区では、縄文時代の土器約30点と、時代不明の土坑が５基検出された。

縄文時代の埋納土器　縄文時代後期初頭の称名寺式またはこれに併行する型式と推定される土器が検出された。正位の状態にあったことや底部が欠損していたことから意図的に埋納されたものと推測される。ただし包含層が締まりの弱い黒色土壌中だったことから、埋納した土坑の掘り肩等は観察できず、埋納を示す直接的証拠は認められなかった。また、住居址等の遺構も検出されなかった。周囲からは土器片が比較的集中して検出された。

時代不明の土坑　Cb区南壁にて土坑４基、Cc区にて土坑１基が検出された。Cb区の土坑のうち１基は覆土の状態からして最近のもので、ほか３基は縄文時代かそれよりも下る時代のものと推定される。この３基のうち１基は直径約60cmの円形を呈し、深さ約70cm、内部には直径20cm程度の亜角礫と亜円礫が10点以上包含されていた。人為的に入れられたものであろうが、配列された状況は認められなかった。現在のところ機能は不明であるが、これらの特徴はCc区の土坑１基のそれとよく似ている。

総括　管見の限り、県内における縄文時代の埋納土器の検出事例は、住居址内外を含めて全部で15例（明らかな土器棺を除く）が知られている。関東から中部に比較すると非常に少ないため、この発見は希少な例といえるだろう。この遺跡では縄文時代早期と後期の少なくとも２時期の存在が確かめられたことになるが、両時期ともに、まだ本調査されていない南半への広がりが期待される。（阿部　敬）



遺跡全景

礫を含む土坑

埋納土器